東アジアにおける薛瑄『讀書錄』の刊行と變容

白井順

はじめに

薛瑄は、宋代理學を繼承し、明代理學の正統として最初に從祀された人物である。彼の代表作『讀書錄』は、以下の記述で明らかにしていくように明・清時代を通じて廣く讀まれ、朝鮮や日本でも出版された。このように『讀書錄』は、明代思想史を考察する上で見過ごせない書物であるにもかかわらず、思想的な獨創性が少ないと見なされたためか、この書に關する專論はほとんどない。

小論は、まず第一章において書誌的整理を行う。明代に出版された『讀書錄』を、①閻禹錫本（成化二年）、②鄭維新本（正德十五年重刻）、③張珩本（嘉靖四年）、④侯鶴齡本（萬曆二十四年）の四種に大別する。中國と日本で最も流布した『讀書錄』十一卷、『讀書續錄』十二卷は③の系統であるが、朝鮮では②の系統が權威ある版本として刊行されていた。①と④は、テーマ毎に薛瑄の言葉を分類した版本だが、兩書の分類方法は異なり、同じテーマでも內容が全く違う。

次に、第二章では、第一章の論を踏まえ、中國における『讀書錄』の簡略化を論じる。何種もの版本と平行して、嘉靖年間になると、簡略版がそのまま『讀書錄』の通稱で通行するようになった。『讀書錄』の簡略版は、弘治十四年に吳廷舉が編んだ『薛子粹言』（讀書錄要語）に始まり、正德十六年にこれを校訂して出版したのが、胡纘宗『讀書錄要語三卷』である。彼は更に『讀書錄』の中から官職にあるものに有益な言葉を選んで『從政名言』を出版した。この二つの再編本は、『讀書錄』と平行して、獨立した薛瑄の著作として東アジアで讀まれることになった。

第三・四章では、朝鮮と日本における『讀書錄』の受容と展開を考察する。朝鮮では、朱子を繼ぐ正統として薛瑄『讀書錄』は、李退溪を筆頭に、高く評價された。朝鮮では、楊廉が從祀を上奏した際に編まれた②の鄭維新本が完全版の底本として傳來していたが、一般的には簡略版である『讀書錄要語』が『讀書錄』として讀まれていた。鄭逑は、壬辰倭亂で燒けた『讀書錄要語』を萬曆三十五年（一六〇七）に再版するに當たって、自ら選んだ『續選』を『讀書錄要語』の後ろに追加して出版した。その後、この『續選』が附された『讀書錄要語』は、李退溪の學問系統・嶺南派では、日常に卽した基礎的な書物として讀まれたようである。『讀書錄要語』は三卷と短く、そのことが却っ

て一般には二十餘卷本に取って代わり、通稱『讀書錄』として流布していくことになった（以上第三章）。

日本では、③の張珩の系統で、萬曆年間に出版された李淶に基づく和刻本が流布している。本邦では、中國のように簡略版が作られることもなかったし、『讀書錄要語』が讀まれた形跡もない。しかし和刻本特有の點は、『薛文清公策目一卷』が附してあるところである。朱子・陸象山・王陽明の三氏の語錄抄本と『讀書錄抄』を合わせた『宋明四先生語錄』なるものが出版されたのも、特筆すべき日本的受容である。

江戸末期の寛政の異學の禁のとき、政治にたずさわる者の實用書として最初の官板の刊行物九種類の一つに『薛文清公從政名言』が含まれていた。本書は寛政十一年（一七九八）に官刻され、その後も幾度も民間から出版されてこれだけが特化して廣まったが、これもまた日本における薛瑄受容のもう一つの特異な點であった。日本では、朝鮮儒學の影響を受けた山崎闇齋や佐藤直方・淺見絅齋が、『讀書錄』を仁の眞意を得たものと稱贊しただけでなく、柳川藩儒の安東省庵や熊本の横井小楠も薛瑄を高く評價したが、『從政名言』に關する言及はない。このことから日本では『讀書錄』と『從政名言』は、完全に別なものとして受け止められていたことが窺える。

以下、『讀書錄』の刊行樣態と讀まれ方を考察し、東アジアにおける『讀書錄』と通稱されるものの全體圖を主として書誌的觀點から描いてみたい。

一　『讀書錄』というテキスト

『讀書錄』は、薛瑄が自分の修養のために張載の讀書法に倣って、『性理大全』や宋儒の書を讀み、躬行し感じたことを書き留めた「ノート」である。いつかは定かではないが、薛瑄の存命中に編まれている。門人閻禹錫に宛てた晩年の手紙に、「要（もと）むる所の讀書續錄は、但だ愚老自ら遺忘に備うるのみ。亦た何ぞ觀るに足らんや」[1]と言うが、『續錄』は沒後すぐに出版された。薛瑄沒後の翌年成化元年（一四六五）に書かれた徐孚の「續讀書錄序」にその間の事情が記されている。[2]

故郷に隱居したのが薛瑄七十歲、天順二年で、『續錄』は亡くなる天順八年（一四六四）までの箚記であった。この『續錄』刊行の一方で、翌年（成化二年）、門人閻禹錫は『分類讀書錄二十四卷』[3]を出版した（前記①）。閻禹錫本の最大の特徴は、その分類である。[4]その序文で、彼は『近思錄』に倣って分類したと言う。[5]閻禹錫は成化四年（一四六八）に薛瑄の詩集も編纂し、その序文に「著書二十四卷、自ら號して曰く讀書錄」[6]と述べている。『讀書錄』は本來アトランダムな讀書メモなのに、それらをテーマ別に分類して再編集することは、一つの思想的な行爲である。特に『近思錄』に倣って編集するという思想的な流れは、この閻禹錫の『讀書錄』を底本にして編集された簡略版『薛子讀書錄節要』にも受け繼がれていく。內閣文庫所藏、康熙四十二年の華希閔『薛子讀書錄節要』は、閻禹錫『讀書錄』を、『近思錄』と同一の十四項目に再編したものである。張廷樞の序文に、

錫山の華子豫原、其の書を讀みて且つ人と之を共にせんと欲するも、卷帙の浩繁を以て未だ遍觀して盡識すること能わず、其の要を撮りて十四卷と爲す。凡例は全て近思錄に倣う。[7]

とあり、更に『近思錄』に近づけようとしたようである。

次に②の鄭維新『讀書錄』であるが、この版本の出版背景には、薛瑄の從祀問題があった。楊廉は二十六、七歲のとき初めて『讀書錄』

を讀んだと言う。[8] 弘治九年（一四九六）楊廉は、『讀書錄』を全國に廣めようと出版を上奏する。[9]

山東章丘縣[10]で出版されたことは、①の閻禹錫『讀書錄』序文でも觸れているが、『讀書錄』の全國的な知名度は低かった。彼の上奏以後、福建で『讀書錄』が坊刻され、[11]『讀書錄』の知名度は上昇してきた。正德十五年（一五二〇）に重刻された版本には、鄭維新の「序」と、嘉靖元年に從祀を上奏した許讚の「後序」が載せてある。鄭維新の序には「偶たま安運使奎　此を持して予に告ぐ、舊本は漫漶にして殊に繙閲に便ならざるを以て、之を書院に重刻し以て來者を待たんと。適たま予の意と會するものなり。因りて取りて之を手校し、釐めて十卷と爲し、之を鋟梓に附す」[12]と言うように書院で重刻され、楊廉の上奏のコンセプトに沿った讀まれ方をしていたことを傳えている。

次に、嘉靖四年（一五二五）序刊の石州・張珩本[13]は、最も流布した版本で四庫全書・和刻本の底本となっている（前記③）。蓬左文庫所藏の嘉靖三十三年（一五五四）の刊記を持つ『薛文清公全集四十卷附一卷』は、張珩の版本を趙孔昭が重校したものを底本にしており、そこに附された朱廷立の序に「先生　讀書して錄有り。學ぶ者　傳誦すること已に久しきも、全書は猶お未だ之を多く見ざるなり。侍御趙子潛氏、閩に按たりしとき手ずから集めて之を校し、刻して以て同志に示さる」[14]とあり、それまで續錄と合本した全書はあまりなかった。福建で趙孔昭が校定したことで、『讀書錄』は『續錄』と併せて刊行されるようになった。[15]

萬曆年間に入って、侯鶴齡が『薛文清公讀書全錄類編二十卷』を出版する（前記④）。この版本は、萬曆四十二年に張銓[16]が重刊している。この版の特徴は、その分類方法である。[17] 萬曆二十四年の張崇儒の序によれば、

全錄は、憲宗朝に當たり命じて建陽に刻せしむ。而して鄢陵楚中に刻有り、青州章丘に刻有り、閩喜及び安邑鹺上に刻有るも、獨り耿に續編無し。何ぞ文獻と稱せんや。松磐侯君　先生の里に生まれ、此の書を耽愛し、沈潛すること二十餘年、携えて深澤に令たりしとき、類分して鋟梓す。[18]

憲宗朝即ち成化年間に福建で出版されて以降、耿には續編がなかった。侯鶴齡の萬曆二十七年自序によると、薛瑄が從祀される前年の隆慶四年から萬曆十二年の間に編集を行ったという。[19] ここで面白いのは、侯鶴齡が①の閻禹錫『分類讀書錄』を知らなかったという事實である。そのために、兩書の分類方法がまったく異なり、同じ「分類」と言っても完全な別物になっている。例證として左に「道體」の最初の二行を擧げてみる。

【閻禹錫本】
太極者、萬理之總名。
太極只是性。

【侯鶴齡本】
道體、無內外、無古今。
氣化流行未嘗間斷、可見道體無一息之停。

門目の「道體」に對して、閻氏は「太極」を含む記述を選び、侯氏は「道體」を含む記述を選んでいる。『四庫提要』で、侯鶴齡本は薛瑄の本意を失うと批判され、[20] 張珩の編集形式に基づく版本が四庫全書では採用された。しかし侯鶴齡『讀書全錄類編二十卷』は、張伯行『正誼堂全書』所收『薛文清公讀書錄八卷』の底本となった。八卷に簡略化された張伯行『正誼堂全書』所收『薛文清公讀書錄』は清代咸

豐元年に文淸書院を重修した際に重刊され、『記過齋叢書』にそっくりそのまま再收錄されている。

最後に、薛瑄末裔が出版したものを孫嘉淦が乾隆十一年（一七四六）に校訂して重刊した『薛文淸公讀書錄』全二十三卷[21]（讀書錄十一卷・續錄十二卷）は、三種の版本つまり洛陽本（①閻禹錫の成化本）・石門本（②鄭維新の正德本）・河津本（④侯鶴齡の萬曆本）で校勘したものである。これを底本としているのが山西人民出版社『薛瑄全集』（上下）である。

ところで『讀書錄』は、薛瑄自身がどの本のどの箇所を讀んで書いた言葉なのか記していない限り、實際にはどの書のどの箇所を讀んで思った言葉なのか正確には分からない。嘉靖年閒になって『諸儒理學語要』や『大儒心學語錄』といった思想的色合いが異なる人物の言葉を寄せ集めた書物が編集される中で、『讀書錄』は先生が弟子に語った口語の肉聲ではないにもかかわらず「語錄」という形で捉えられ始めた。萬曆癸卯の『宋明四先生語錄』（四名公語錄）では、朱子・陸象山・薛瑄・王陽明を竝べているが、薛瑄のパートは「讀書錄抄」[22]である。このように、薛瑄は語錄を殘していないのにもかかわらず、明代の讀者は、文言で書かれた『讀書錄』を「語錄」として受けとめていた實情をこれらの題名が示している。萬曆年閒の高攀龍も「薛文淸、呂涇野二先生の語錄中、甚だしき透悟の語は無し。後人或いは之を淺視す。豈に甚大の正に此に在るを知らんや」[23]と述べ、やはり『讀書錄』をストレートに「語錄」と呼んでいる。

二　『讀書錄』の簡略化と胡纘宗

前章では『讀書錄』の完全版について述べたが、弘治十四年に吳廷舉が『讀書錄要語』という簡略版を作ったことを始めとして、嘉靖年閒になると、簡略化したり、再編したりしたものが次々と作られて樣々な形で『讀書錄』は讀まれていった。表題だけ見ても、嘉靖庚子の刊記をもつ王奠『大儒心學語錄』卷二十四には「敬軒薛先生語」[24]として七百二十九條引かれているし、嘉靖二十三年（一五四四）に曾才漢が編集した『諸儒理學語要』の卷一は薛瑄である。萬曆の曾省吾が編集した『薛王二先生教言』、また劉斯源『大學古今通考』十二卷の卷七「薛敬軒先生大學語錄」も、『讀書錄』から拔粹して抄錄されている。簡略版でも「讀書錄」と通稱されたが、そのうち『讀書錄要語』と『從政名言』は、東アジアにおける『讀書錄』の受容と展開に大きく關わっているので、本章ではこの兩書に焦點を絞って論を進めていく。前者は中國國內で別の展開を遂げただけでなく、更に朝鮮でも特異な讀まれ方をし、後者は日本で特有の讀まれ方をした。

『讀書錄要語三卷』（別名『薛子粹言』）[26]は、弘治十四年（一五〇一）に吳廷舉が『讀書錄』を三卷に編集したものである。『讀書錄要語』と同時に『居業錄要語』を出版した張吉は「讀書錄要語序」で次のようにいう。

河東薛文公先生の讀書錄及び續錄は、舊嘗て購いて之れを讀み、竊かに先生の察理の密、造道の深と、かの立言の精切的確とを見て、未だ嘗て卷を掩いて深く嗟かずんばあらず。…是に至って復た是の編を成都に得、少府蒼梧吳君　獻臣、乃ち錄內の若干條を錯擧し、萃て一帙と爲し、名づけて要語と曰う。姑く是れに卽して之れを觀れば、多きものは數十言を累ね、少なきものは一二句に止まるも、高きも空虛に淪まず、卑きも形器に溺れず、學ぶ者の心身日用の實に切なるに非ざるは無し。[27]

『讀書錄要語』は、約二十年後の正德十六年（一五二一）胡纘宗によって皖（安徽）で再び出版されることになった。『讀書錄要語三卷』には、蕭世賢「薛氏讀書錄後序」と「刻讀書錄跋」が附され、『要語』の編集は吳廷舉（東湖）であると念を押すように記す。

可泉胡子　讀書錄を皖に刻す。世賢　一冊を挾み秀に來たりて以て諸生に示す。錢敎諭文曰く、胡子　皖の學ぶ者に惠むを以て、秀の士に惠むは如何、と。曰く、吾が志なり、と。是に於て文遂に之れを學宮に刻す。刻成り、序を請わるるに文に謂いて曰く、此れ讀書錄要語なり。熟玩して之を精擇し、以て天下の士に惠む者は誰か、大中丞東湖先生吳公なり。[28]

可泉とは胡纘宗のことである。[29] 胡纘宗が安慶知府を務めた際に編纂した『安慶府志』藝文志には「薛文淸公讀書錄略」の記錄があり、皖（安慶）と秀（秀水）の學宮で讀まれていたことが分かる。[30] 蕭世賢は薛瑄『讀書錄二十卷』を知ってはいたがまだ見たことがなく、南都で『要語三卷』を得たと言い、[31] 胡纘宗は彼の版本と違っていたので校訂したと「薛氏讀書錄序」に述べる。[32] 嘉靖年間に編まれた袁褧『金聲玉振集』六十卷に「薛公讀書錄一卷」として、『要語』がそっくりそのまま收錄されている。

嘉靖甲寅の年、胡纘宗が七十五歲の時に編纂した『願學編』によれば、彼は思想的には王雲鳳や羅欽順を師とし、廣東で理學を牽引した何維柏や魏校・湛若水・李濂、そして關中で當時理學の一大勢力であった馬理・呂柟などと交友していた。[33] その中でも薛敬軒の正脈と言われた呂柟は、薛瑄の祠堂記も書いたことで有名である。

胡纘宗は『願學編』卷下で「薛敬軒の語錄は皆踐履の中より來たり、胡敬齋の語錄は皆淹貫の中より來たり」と述べ、彼もやはり『讀書錄』や『居業錄』を「語錄」のように捉えていたようである。彼は文集で薛瑄の從祀についても著述の少なさを理由に未だなされないことへの疑問を述べている。[34] 李濂も鄉里で薛瑄の從祀問題に關する文章「薛文淸公從祀答問」[35]を殘している。

胡纘宗は『讀書錄要語』だけでなく、さらに薛瑄の『讀書錄』の中から、官にある者のために日用に密切な言葉を選んで『從政名言』を編集した。彼が五十六歲、嘉靖十四年（一五三五）の序文には、次のように言う。

纘宗　郡に守たりしとき、嘗て敬軒讀書要語を以て錄して之を刻し、以て聖を學ぶ者と共にせり。藩に參するに及んで又其の爲政名言を錄するは、以て王を學ぶ者と共にするなり。…敬軒の語に至りては、獨り王道に本づくのみならず、實に日用に切にして、固より今時の官に居る者の藥石也。[36]

胡纘宗が『從政名言』を編集した嘉靖初頭は、從祀も大きく變化した時期である。[37] 許齊雄氏の研究によれば、嘉靖元年の許讚の從祀上奏では薛瑄の「文行一致」が言われ、次第に從祀の基準も「躬行實踐」となっていった。[38] 嘉靖十八年（一五四〇）年九月には、御史楊瞻が再度薛瑄の從祀を上奏するが、隆慶五年（一五七一）になるまで實現することはなかった。從祀問題と『從政名言』との直接的な繫がりは不明だが、先述の李濂も『從政名言』の跋文を記している。

夫れ學と政とは一なるのみ。是れ之を體とするは學術爲り、之を用とするは政事爲り。…國朝の河津薛文淸公、嘗て曰く、讀書窮理は須らく實に見得すべし、然る後に心身に驗し、體して之を行うべし。然らずんば櫝を買いて珠を還すと異なる無きなり、と。此れ學と政と一なるの說なり。[39]

つまり薛瑄は「躬行實踐」の人であって、『從政名言』は學問と政事を一體化した實踐の書だというのである。胡纘宗の友人・魏校は官に居る者への手紙で「偶たま薛文清公の從政名言を檢し、上の備覽に奉ず。其の韋弦爲るや大なり」[40]と薦めている。九州大學中央圖書館所藏の朝鮮本『從政名言三卷』[41]には、萬曆丁亥（一五八七）の劉九容[42]の跋文が附され、權應仁の奥書がある。劉九容の跋文[43]にも、「內聖」（學問）と「外王」（政事）を兼備したものといい、李濂と同樣『從政名言』は爲政者の指南書で、『讀書錄』と表裏にあるものだと考えている。

こうして胡纘宗の手による『讀書錄要語』と『從政名言』は、彼の周邊を通して世に送り出された。この兩書『讀書錄要語』と『從政名言』を併せて再編したのが谷中虛『薛文清公要語』內外二篇である。[44]內篇は『要語』を抄錄したものであり、外篇は『從政名言』を抄錄したものである。嘉靖甲子（一五六四）谷中虛の序文には、次のようにある。

> 先輩東湖吳公、曾て讀書錄中の語を摘びて粹言を爲し、後に可泉胡公も又其の語を集めて讀書錄略を爲す、然れども集む所は粹言と異なる無し。餘二公の意に因りて、復た其の未だ備わざる所を增し、分ちて內外兩篇と爲す。蓋し內篇は己を脩め德を立つる所以にして、外篇は事に應じ物に處する所以なり。遂に總題して文清要語と爲す。[45]

嘉靖四十五年、徐栻「刻文清先生要語序」によれば、谷中虛が南中で出版し、後にまた漢陽の盛賚汝が再版した。更に、萬曆三十年に吳獻臺が、三十三年には范浹が重刊し、萬曆年間には比較的流通していたらしく、例えば萬曆年間の『虞山書院志』卷六書籍志には「薛文清公讀書錄」とともに「薛文清要語」が記されている。この書は清代に入っても讀まれ續け[46]、特に注目すべきものとして、康熙五十三年に富達禮が滿語に翻譯して出版されたものがある（內閣文庫所藏）。

萬曆三十一年に出版された『皇明經世實用編』卷二十七の諸儒語錄には、薛瑄・胡居仁・陳白沙・王陽明四名の著作の簡略版が收錄されている。ここでは『讀書錄要語』と『從政名言』がセットにして收錄されており、このことから兩書は獨立した薛瑄の著作であり、且つこれらの簡略版が完全版というべき『讀書錄』に代わるものであると認識されていたことが窺える。

以上のように、嘉靖年間の理學の影響を受けた『讀書錄』から『讀書錄要語』と『從政名言』が生まれたわけだが、次にそれらが朝鮮と日本でどのように讀まれたのかを見てゆく。

三　朝鮮における『讀書錄』

朝鮮では、ちょうど朱子學の黃金期に傳來したようで、『讀書錄』も注目された書物の一つであった。李退溪は「答李剛而書」で「薛公讀書錄、困知・傳習の比に非ず。其の言は皆親切にして味有り。人を喚醒せしむる處最も多し。偶たま洪應吉に因りて貴府に刊本有るを聞く」と述べている。李退溪の論爭相手として知られる奇大升も「近來、中原より流布するの書一ならず。薛文清讀書錄も亦た其の一なり。今方に印出さる。議論も亦た疵なきこと能わざるも、學者以て考見の資と爲して可なり」[47]と述べている。『讀書錄』はあまり新味のない、斷片的で平易な言葉の羅列ではあったが、朱子の言行を忠實に祖述しようとした眞摯な姿勢と、その日常に卽した平易で實踐的なところが却って朝鮮では高く評價された。

朝鮮で讀まれた版本は、主に鄭維新『讀書錄十卷』で、『續錄』は單行でも出版された。朝鮮での『讀書錄』は、洪柱世が一六五六年に重刻したものがよく流通したようである。この版本は、卷頭に洪柱世「刻讀書錄序」、鄭維新「重刻讀書錄序」（一五二〇）が載せられ、『續錄』の卷頭に許讚の序が附せられたもので、『讀書錄』八卷『續錄』六卷の全十四卷である。[48] 洪柱世（一六一二―一六六一）は、榮川郡守で朝鮮の人であるから、この版本が朝鮮で作られたものであることは疑いを容れない。彼の序には、「讀書錄一編を具す。柱世　少きとき家藏の讀書錄要語を見るも未だ何等の書爲るかを知らず」[49]と言い、彼が最初に接したのは、『讀書錄要語』だったことが分かる。

李退溪の高弟で、彼とともに陶山書院に祀られた趙穆の『月川先生年譜』には「先生五十七歲…又た薛文淸讀書錄要語を愛す。竝べて二冊と諸を案上に置く」、「常に薛文淸讀書錄を覽、手ずから其の要語に圈し、諸を几案に置く」[50]などとあり、趙穆も『讀書錄要語』を愛讀したことが記されている。そして、趙穆の門下とも言うべき鄭逑は『讀書錄要語』を川谷書院で出版した。萬曆乙亥（一五七五）成渾は、鄭逑から直接川谷書院の新刊を貰い「書薛敬軒讀書錄後」[51]を書いている。このあと鄭逑は、壬辰の亂で燒失し、殆ど見なくなったので、再び永嘉で出版することにしたと述べ、『要語』の後に自分が選んだ『續選』を附して出版した。萬曆三十五年（一六〇七）の序文[52]で、「胡君何ぞ必ずしも之を去らんや。今吳氏の舊に還し、以て其の讀書錄の要語爲るを表す」と述べ、胡續宗ではなく吳廷擧の狀態に戻したと言い、鄭逑は吳廷擧の方が正統な形だと考えていて、その原型に近づけようとした。鄭逑が編集し永嘉で出版した『薛文淸公讀書錄要語續選』は、李退溪の系譜を引く嶺南派で讀まれるようになった。鄭逑の門人・黃宗海は、天啓五年（一六二五）に「讀書錄要語續選竝附傳書跋」[53]を記し、嶺南派以外ではまだ『要語續選』の認知度が低かったこと、徐挺然が皖本（安徽）を入手したこと、陽明學に對する嫌惡など當時の狀況を傳えている。このように、萬曆・天啓年間では、儒學者が讀む書であった。例えば萬曆天啓年間に『芝峰類說』で知られる李睟光（一五六三―一六二八）は、讀書錄の解釋をした「讀書錄解」[54]を記している。では彼がどの版本を見て注釋したのかと、その引用箇所六十一條を追ってみると、『讀書錄要語』であった。李睟光は、『芝峰類說』の「學問」（儒道部）でも『讀書錄』を引用している。

『要語續選』は、その後崇禎十五年（一六四二）金世濂によって重刊された。金世濂（一五九三―一六四六）は、一六三六年の通信使の副使として日本へも來たことがある人物である。壬辰倭亂以後、性理學の書が少なく、『近思錄』や『小學』とともに『讀書錄』を地方に送って出版させ、毎月講誦させるべきだと上奏する文章[55]を書いている。その理由として、國家の危機に際して理學の基本的なものこそが大切だからだと述べている。句讀をつけたものを進めていることから考えて、この『讀書錄』は『讀書錄要語』であり、士大夫に對して基本的な書物のうちでも小學書として讀ませていたようである。明淸鼎革期を生きた河弘度の「師友門徒錄」に「小學・近思錄・四子の書の外、薛子讀書錄要語は最も下學に切なり」とあり、『小學』『近思錄』と竝べて、『讀書錄要語』を擧げている。

このように、朝鮮では『讀書錄要語』が通稱『讀書錄』として廣く讀まれており、基礎的書物として使われていた。一般に題名も『薛子讀書錄』となっていることが多く、『讀書錄要語』が『讀書錄』として認識されていた。

先述したように、朝鮮でも『從政名言』は出版され、萬曆丁亥（一五八七）の刊記があり李退溪の知人・權應仁の奥書を持つ版本が九州大學に現存する。他に朝鮮における讀まれ方を知る重要な情報を記したものとしては、寛文九年（一六六九）の和刻本の卷末に附された朝鮮の李義臣の隆慶戊辰（一五六八）の跋文がある。

予今年春、京城に到りて元の相國混（人名）に謁し、語　薛敬軒讀書錄に渉る。相公曰く、文清の心學は、但だ此の錄に著かなるのみならず、又た從政名言有り。因りて搜して示さる。乃ち袖にして還り、鋟して博く布かんことを謀る。蓋し君子の己を正し人を治むるの法、心を存し物に應ずるの方、字字精切、句句喫緊にして、日用當行の道に非ざるは無し。[56]

これによれば、朝鮮では『從政名言』はあまり讀まれていなかったようである。管見に留まった限りでは、鄭經世が「題從政名言後」[57]という詩文を殘している程度である。英祖年間、中國でいえば雍正から乾隆にかけての人物、趙顯命は通判の韓德弼が出版した『從政名言』に「薛文清從政名言跋」[58]を記している。そこには、「居官莅職の者の龜鑑と爲すべきを要す」と述べるものの、「必ず先に先生の著す所の讀書錄を讀み而る後に…」と、『讀書錄』を先に讀むべきことを念押ししている。

四　日本における『讀書錄』

日本では、朝鮮儒學の影響を受けた山崎闇齋をはじめ、林羅山もみな一様に薛瑄のことを高く評價している。[59]林羅山が書寫したのは、[60]朝鮮本『讀書錄』十卷つまり、鄭維新本である。朝鮮通信使や山崎闇齋と交流のあった貝原益軒もまた「論薛敬軒」と題し、「篤信、壯歲に好んで薛文清讀書錄を讀み、其の要言に遇えば、之に加うるに朱抹を以てす。頃ごろ手に信せて嘗て讀む所の舊本を搜出し、舊加うる所の朱抹を披閲し、其の玩すべき疑うべき所を擧げて此に書す。且つ閒ま鄙言を其の下に加うと爾云う」[61]と述べ、『讀書錄』から三十八條引用し、コメントを附している。

山崎闇齋も『文會筆錄』において『西銘』を理解する際には『讀書錄』の「讀西銘」の說を尊重すべきだと述べている。[62]更に『薛文清文集』から拔粹され、山崎于保の名で寛延二年（一七四九）に出版された「戒子書」[63]もあり、崎門學派では薛瑄『讀書錄』を重んじた。特に佐藤一齋の學派でも、一齋に「讀書錄跋書」がある以外に、「初學課業次第」[64]には必讀の書に『朱子全書』と竝列して『讀書錄』が入っている。日本で最も早期の讀書手引き書である元祿十二年刊『初學讀書範』[65]（一六九九）では、しきりに薛瑄の語を引用し「朱學教讀書目」の最後に『讀書錄』[66]『讀書續錄』を置いている。同じく尾張の鷲津毅堂『明倫堂讀書階級』[66]では、『讀書錄』は『朱子語類』と同列に扱われていて、高度な理解が必要な書物であったことを窺わせる。

一般に日本で流布した版本は、萬曆刊の李浹本で、これは前記③張珩の編集を踏襲したものである。[67]面白いことに、李浹本以外の和刻本は出版されていないので、漢籍で讀んだ人以外は、皆この和刻本を讀んでいたようである。和刻本の特徴としては、呂柟の「重建薛文清公祠堂記」と『薛文清公策目一卷』を附していることである。『薛文清公策目一卷』は、蓬萊甯杲が類次し、張銓が校勘したもので、五十八の口頭試問集である。[68]しかし『策目』は、ほとんど單行で出版された形跡がない。內閣文庫が所藏する『讀書錄』の八冊目に附されているものには、山崎敬義の署名で次のようにある。

右　薛文清策目五十八道なるものにして、蓬萊の甯杲の類次する所なり。頃ごろ人の携えて來たる有りて云う、此れ世の希に見る所なり、其れ信ずべきかと。豫　謂らく、嘗て薛氏の門人閻禹錫の編む所の門類讀書錄を觀しとき、其の卷末に之を登す。又た文清全集を閲するに、其の第二十八卷に試諸生策一道を載す、即ち五十八道の第一道なり。[69]

このように、①の閻禹錫『分類讀書錄』を根據に薛瑄の著作だと判斷されたようである。試驗問題である「策問」が、なぜ科擧制度のない日本で讀まれたのかは定かではない。また、日本特有の『讀書錄』受容の様相はといえば、和刻本『四名公語錄』である。これは、もともと凌瑄が『讀書錄』を抄錄し、朱子・陸象山・王陽明の三氏の語錄抄本と合わせて、吳勉學が萬曆癸卯に『合刻四先生語錄』として出版したものを底本としている。『四名公語錄』は、慶安五年（一六五二）以降、何度も出版され、日本ではよく讀まれていた。しかし、この底本となった吳勉學の原本は、中國・臺灣・韓國にも見つからず、和刻本以外にその姿は分からない。[70]日本では、大鹽平八郎が天保二年に「洗心洞學名學則竝讀書書目」に、經書に竝べて『四名公語錄』を讀むことを述べている。

特に日本固有の讀まれ方として、江戸末期に限ってのことではあるが、政治にたずさわる者の實用書として『從政名言』が讀まれていた事實を看過できない。蓬左文庫と九州大學文學部が所藏する寛文九年刊の『從政名言』には、先述した朝鮮・李義臣の跋文と共に、日本人の田探玄なる人物が記した寛文八年（一六六八）の跋文が附されている。そこには羅整庵『困知記』を引用し、續けて次のように記す。

此の言に依りて以て之を見れば、則ち文清公の道德事業も略ぼ亦た知るべきなり。餘　今年夏、豐城に至り、家君を問うの次、偶たま一禪林に遊びて斯の書を見るを獲、乃ち之を挾みて還る。…先儒は小學の書を以て神明父母に比ぶ。夫の居官守職する者の若きは斯の書を以て神明父母に比べて之を信じ之を敬す。之を大用すれば則ち能く國家を利し、之を小用すれば則ち亦た能く其の身を保たん。…倭訓を加えて剞劂氏に命じ、繡梓して以て其の傳を廣む。道に志すの士、斯の書を忽がせにすべからず。[71]

この田探玄なる人物が豐城（臼杵城）の禪林で手に入れ訓點を施し出版したものが、日本では最初に訓點を附されて讀まれたようである。どういう經緯か不明ではあるが、寛政異學の禁のとき、『從政名言』は最初の官板の九種に選ばれ、嘉永四年に昌平坂學問所で重刊もされ、[72]その後も民間で出版されている。[73]このように『從政名言』だけ特化して廣まったというのが、本邦における薛瑄受容の大きな特徴である。先に引用した『初學讀書範』に『從政名言』がないことや、崎門學派の『從政名言』への言及がないことから推測すれば、この書は官刻によって流布したと思われる。中國では『讀書錄要語』と表裏であったが、この書は『三事忠告』『牧民心鑑』などの官箴書と合本されており、『讀書錄』と切り離され、完全に別のものとして讀まれていたようである。『漢學者傳記及著述總覽』によれば、池永碧遊亭に『從政名言國字解一卷』があったという。

結びに代えて

以上、『讀書錄』は東アジア全域で正統な朱子學の書として讀まれたが、地域や時代によって、意識の違いがあったということを檢證した。「讀書錄曰」と引用されてはいても、どの版本でどのように讀ん

でいたのかということは分からない。そこで筆者は、書誌的な整理をし、分析を加えたのである。

中國では、碩學の「語錄」として『讀書錄』は讀まれていた。そういう意識があったからこそ、簡略化や再編が繰り返された。そしてその中で作られた『讀書錄要語』と『從政名言』は獨立した著作として見なされるようになる。朝鮮では、平易で切實な正統的朱子學の言葉の集積ないし寶庫として『讀書錄』は高く評價された。しかし『讀書錄』よりも『讀書錄要語』のほうが普及してしまったため、却って『要語』が『讀書錄』に取って代わり、『近思錄』のような基礎的書物として讀まれるようになった。日本は、逆に『要語』を讀んだ形跡はなく、一般に『讀書錄』は和刻本で讀まれていたが、『朱子語類』や『朱子全書』に比類するような書物とされている。實用的な官箴書の類として、『從政名言』だけ特化して讀まれていることも日本特有の現象である。『讀書錄』は東アジアにおいて何故かくも長期間に亘って廣範に讀み繼がれてきたのかという問題を解く一段階として、小論では讀まれ方の違いを明示するに止めた。各版本の內容や受容の異なる各地域の意識の內實にまで踏み込んだ思想的檢證も今後の課題である。

注

(1)『薛文清公全集』卷二十九「答閻禹錫書」「喩取朱子文集語類諸書、掇其精者、題曰晦庵要語、云欲寄示此。正欲快覩、早寄爲妙。所要讀書續錄、但愚老自備遺忘耳、亦何足觀也」。

(2)「續讀書錄者、河汾薛文清公之手筆。…自御史至理官所箚記者、已爲識者板行矣。及公擇幾務之重、退居龍門、日復以五經四書講敎于家、精思有得、復箚記之、積爲十卷。公薨、嫡孫褘、方第進士、予寧葬公、捧以示予」。

(3) この版本は、前田尊經閣が所藏し、御茶ノ水成簣堂文庫は嘉靖二年の重刻本を所藏している。

(4) 小論末尾の目次表を參照。

(5)「讀書錄者、先師河東薛文清公手筆、前後二十四卷也。…先師歿之二年、愚反復讀之深有感焉。乃倣近思錄分門別類、去其重複、釐爲二十四卷」。

(6)『河汾詩集八卷』序文。

(7)「錫山華子豫原、讀其書且欲與人共之、以卷帙浩繁未能遍觀而盡識、撮其要爲十四卷。凡例全倣近思錄」。

(8)『楊文恪文集』卷十七「胡敬齋居業錄序」「本朝正統景泰間、以理學爲倡者河東薛敬軒。其讀書錄、廉年二十六七始得見之。自是徧攷國初以來諸公所著述、求粹然一出于正、未有或之先者也」。また嘉靖二年に閻禹錫本を重刻した蕭鳴鳳の序には「鳴鳳視學南畿、……偶於豫師月湖楊先生所求得讀書錄善本、因託寇京兆子惇鋟梓以傳」とあり、南京で讀まれていたことがわかる。なお、寇天敍（子惇）は、注33に見えるように呂柟や胡纘宗と親交がある。

(9)「臣聞、其讀書錄嘗鋟梓於山東章丘縣。乞勑有司取其板本、於國子監、俾六館諸生皆得摹印觀覽。…今京師監學止有王安石、呂祖謙輩文集。…此外仍以印本發下福建書坊、翻刻市鬻、務使天下之士皆得見之。夫既祀瑄而又廣布其書、則人皆知本朝亦有爲此學者。豈不有所興起者乎、又安知不有由瑄上溯宋儒者乎」。

(10) 閻禹錫『讀書錄』序文「書成、友人山東章丘尹鈞州張景祥、考績至京師、見而嘆曰、此吾道正脈也。願捐俸鋟梓以廣其傳。況山東乃先師持節提調學校舊歷之地。遂書以歸之」とある。

(11)『國榷』卷四十三　弘治九年十二月の條。

(12) 「偶安運使奎持此告豫、以舊本漫漶、殊不便繙閱、欲重刻之於書院、以待來者、適與豫意會也。因取而手校之、釐爲十卷、付之鋟梓」。

(13) 和刻本も張珩の「重刻讀書錄引」を載す。韓國の奎章閣など各研究機關が所藏しているものには、卷頭に建安の田賦の跋文もあり、跋の刊記は「嘉靖乙酉（四年）」である。跋文には「右讀書錄、并續錄凡二十三卷。作者爲我朝河東薛文淸公、新而梓之者、爲我大侍御石州張公也」とある。

(14) 「先生讀書有錄。學者傳誦已久、全書猶未之多見也。侍御趙子潛氏、按閩手集而校之、刻以示同志」。嘉靖三十三年、何尙賢が延安で刻したものには、「庚戌入覲時、於書肆中復獲公讀書錄、傳之所謂二十卷者、始克見其全書……殆今二十年後、病根種種、覺未療其一二、暇日取二錄合而十卷、梓於延郡、置諸座右、因以溥其傳」とあり、續錄と合本にしたものは趙孔昭以前から存在したようだ。

(15) 『薛文淸公全集四十卷附錄一卷』の卷一～卷十が『讀書錄』、卷十一～卷十七が『讀書續錄』で、『讀書續錄』は鄢陵の陳棐の校訂である。趙孔昭（趙玉泉）の版本に關して、陳棐『陳文岡先生文集』卷十五「刻薛文淸公讀書全錄序」に、「比沈子刻公之書、其于道化、豈小補哉。…予始奏刻公書、一時人士同心仰重。初以全錄奉趙王枕易、王卽刻之藩邸。繼以全錄貽侍御趙君玉泉、君卽刻之閩省。今以全錄復沈君維藩、沈卽刻之閩喜、是予刻梓文淸之遺書、有此三遇其人也」とあり、趙王枕易（朱厚煜）が出版したものに基づいたと思われる。なお、『讀書續錄』については、四庫全書本は全十二卷、朝鮮で刊行されたものは全六卷、「全錄」所收本は全七卷と異同がある。

(16) 萬曆三十二年進士、泗水の人。張銓はこれ以外に『敬軒薛先生文集二十四卷』も出版し、『薛文淸公策目』でも校訂者として名前が出ている。

(17) 小論末尾の目次表を參照。

(18) 「全錄當憲宗朝命刻建陽。而鄢陵楚中有刻、靑州章丘有刻、聞喜及安邑鹺上有刻、獨耿無續編。何稱文獻。松磐侯君生先生里、躭愛此書、沉潛二十餘年、携令深澤、類分鋟梓」。なお、文中の「耿」は地名（山西・河津、薛瑄の出身地）と取った。

(19) 「錄編於隆慶庚午至萬曆甲申、餘令深澤、刊以布多士。後歸田里、僻居西疇、讀有遺落錯簡者、再爲訂證。協吾鄉同志捐助重梓、內再刪其重複、則會孝義陽溪趙君之議也」。

(20) 「萬曆中有侯鶴齡者、因所記錯雜、更爲編次刪去重複、名讀書全錄。然去取之閒頗失瑄本意。今仍錄原書以存」。

(21) 都立中央圖書館、および島田虔次氏舊藏。

(22) 『四名公語錄』の校正者は吳勉學で、「朱子語錄」が周汝登・陶望齡、「象山語錄」が耿定向、「讀書錄抄」が凌琯（歙縣新安の人）で、「陽明先生則言」は錢中選である。

(23) 『高子遺書』卷五「薛文淸、呂涇野二先生語錄中、無甚透悟語、後人或淺視之、豈知甚大正在此」。

(24) 嘉靖年閒『百陵學山』所收「薛子道論」、『薛文淸公理學粹言』などがある。なお『薛子道論』は『百陵學山』所收本は一卷、『學海類編』所收本は三卷、內容も異なる。

(25) 引用の後に『書敬軒先生語後』が附され「敬軒有讀書錄續錄若干卷、東湖吳公雖曾采錄、多遺厥粹、莫乃僭加詳輯焉」と記され、『讀書錄要語』を參照したようだ。

(26) 內閣文庫本（299-78）は、『薛子粹言』と題す。また張時徹『芝園定集』卷二十七「重刊二子粹言敍」には、「二子者河東薛文淸、餘干胡敬齋、皆以道學名者也。文淸有讀書錄、敬齋有居業錄、其言粹言者錄之要者也。刻成、人俾一帙焉」とあり、嘉靖年閒に重刊もされた。隆慶四年李懇の『畜德十書』にも「薛子粹言」の書名で、「從政名言」と共に收錄されているほか、萬曆年閒の張鹵の文集『滸東先生文集』卷六に「薛文淸公粹言序」もある。

(27)『古城集』卷四「河東薛文清公讀書錄及續錄、舊嘗購而讀之、竊見先生察理之密造道之深、與夫立言之精切的確。未嘗不掩卷深嗟。…至是復得是編於成都、少府蒼梧吳君獻臣乃錯舉錄內若干條、萃爲一帙、名曰要語。姑卽是而觀之、多累數十言、少止一二句、高不淪於空虛、卑不溺於形器、無非切於學者心身日用之實」。

(28)「可泉胡子刻讀書錄於皖。世賢挾一冊來秀以示諸生、錢敎諭文曰、以胡子惠皖學者、惠秀士何如。曰、吾志也。於是文遂刻之學宮。刻成請序、謂文曰、此讀書錄要語也。熟玩而精擇之、以惠天下士者誰與、大中丞東湖先生吳公也」。胡纘宗『鳥鼠山人小集』卷十五「明故湖廣按察司副使蕭公墓誌銘」によれば、蕭世賢、字は若愚、泰和の人。後學者は梅林子と稱す。成化戊戌（一四七八）に生まれ、弘治乙丑（一五〇五）の進士で、嘉靖戊子（一五二八）に卒す。『鳥鼠山人小集』卷十二「送嘉興蕭太守序」よると、蕭世賢は留都（南京）の比部（刑部の通稱）郎で、胡纘宗が安慶知府のとき知遇を得、「…遷守嘉禾時、纘宗亦移守姑蘇」とあり、安慶から蘇州に移った時に『讀書錄要語』を持ち込んだ。

(29) 胡纘宗（一四八〇―一五六〇）は天水・泰安の人。號は可泉、鳥鼠山人。嘉靖六年に『藝文類聚』を出版したり、『擬漢樂府八卷』『雍音四卷』を著したり、文學特に樂府方面で有名で、著作は『可泉辛巳集』『願學編』など數多い。彼については、李天舒『鳥鼠山人胡纘宗詩選』（書目文獻出版社、一九九三年）に詳しい。交遊關係については、注33を參照。

(30)『鳥鼠山人小集』の顧夢圭の序に「吳迺進諸生翹秀者、絃誦其閒、親爲講授、至手錄河東薛文清公粹言以示、於是吳人士始知有身心之學」とある。

(31)「愚聞薛文清公邃於性理之學、著讀書錄二十卷、多名言、恨未見也。往年、於南都得其要語三卷」。

(32)『鳥鼠山人小集』卷十一「纘宗守皖、得蕭君比部、時砥厲焉。一日出示是錄。類分之、與纘宗所編本少異。回再與校勘、乃從纘宗本刻之、以示皖諸生、使知向往焉」。

(33)『願學編』下五十六葉「予以道德而師虎谷（王雲鳳）先生、整庵（羅欽順）先生、然望其墻、未窺其堂、而長栢齋粹夫（何瑭）、莊渠子才（魏校）、嬌亭時擧（方鵬）、虛庵秀卿（陳子）、谿田伯循（馬理）、涇野仲木（呂柟）、涂水子惇（寇天敘）、而友中川子學（陳講）、方山林夫（餘子）、然歷其階、未入其域。……以政事而師梧山先生（李充嗣）、東湖先生（吳廷擧）、靜齋先生（陳文鳴）」とあり、吳廷擧の名が見える。

(34)『願學編』下四十二葉「國朝理學之傳、其唯薛子。朝臣屢以從祀孔廟請、至今尚未得請。或以爲著述少。夫顏子程伯子著述亦不多、而顏子之學之粹、程子之學之純、皆去聖人不遠、於道統獨得孔門之傳、而皆從祀宜矣。若薛子讀書錄、原於性、本於聖、固多名言、且俱從踐履中來、視齊魯論弗畔、豈世儒之所能及…讀南宮疏略云、衆議薛瑄從祀、言當卽祀者廿有三人…本朝理學稱首曰、國家眞儒、宜以瑄爲第一、此皆其大概也。…嘉靖初、以薛子從祀請者五人」と述べ、「讀書錄十卷要論也。況多所發明、亦著述也。固一代之眞儒也」と數條に亘り從祀について述べている。

(35)『高渚文集』卷四十五所收。これについては許齊雄「爲昭代眞儒辨護…明朝人討論薛瑄從祀問題的一個重要側面」（『晉陽學刊』二〇〇七年第四期）に詳細な論證がある。

(36)「纘宗守郡、嘗以敬軒讀書要語、錄而刻之、以與學聖者共。及參藩又錄其爲政名言、以與學王者共。…至敬軒之語、不獨本於王道、而實切于日用、固今時居官者之藥石也」。

(37) 趙克生『明朝嘉靖時期國家祭禮改制』（社會科學文獻出版社、二〇〇六年）第三章參照。

(38) 薛瑄從祀の研究として以下がある。許齊雄「我朝眞儒的定義：薛瑄從祀孔廟始末與明代思想史的幾個側面」、『中國文化研究所學報』二〇〇七年第四十七期。許齊雄「薛瑄的道統觀和復性論」、『明清史集刊』第九卷

二〇〇七年九月。

(39)『嵩渚文集』巻七十二「跋薛文清公從政名言後」に「夫學與政一而已。是體之爲學術、用之爲政事。…國朝河津薛文清公、嘗曰、讀書窮理須實見得、然後驗於身心、體而行之。不然無異於買櫝而還珠也。此學與政一之說也」と言い、薛瑄の躬行實踐を强調する。

(40)『莊渠遺書』巻十二「答宋尹」。

(41) 朝鮮本は全三巻で、巻三のみ校正者は尹嗣忠である。『從政名言』の版本も數種類ある。條目を比較すると、乾隆年間に薛瑄の末裔が出版した『從政名言三卷』や『皇明經世實用編』所收のものとも異なる。隆慶四年李懇の『畜德十書』に收錄されている『從政名言二卷』や和刻本『從政名言一卷』とも異なる。

(42) 上郡の人、嘉靖十一年の進士。巻三の校訂者・尹嗣忠は、眞定の人で正德十二年の進士。

(43)「讀薛文清讀書錄而不知爲學、非知學者矣。讀薛文清讀書錄而不知爲政、非政者矣。其學、學內聖也、其政、學外王也。可泉先生有志於文清、□於讀書錄要語・從政名言」。

(44) 谷中虛、字子聲。別號岱宗。海豐縣欽賢の人。嘉靖二十三年の進士。嘉靖四十四年（一五六五）に『陽明先生則言』跋文も書いている。

(45)「先輩東湖吳公、曾摘讀書錄中之語爲粹言、後可泉胡公又集其語爲讀書錄略、然所集與粹言無異。餘因二公之意、復增其所未備分爲內外兩篇。蓋內篇所以脩己立德、外篇所以應事處物、遂總題爲文清要語」。

(46) 日本でも和刻されて讀まれた清の陳弘謀『五種遺規』の一つ『從政遺規』巻上に、「薛文清公要語」が收錄されている。

(47)『高峯集』巻三、論思錄巻下、己巳六月二十日「而近來自中原流布之書不一。薛文清讀書錄、亦其一也。今方印出。議論亦不能無疵、學者以爲考見之資可也」。

(48)「而常有未見全書之嘆、閒嘗得唐本全錄…所以鋟梓與同志共之、往歲佐幕湖西時、方伯姜栢年儒雅好古、語及是事與之合、遂更求原本別爲繕寫、付諸剞劂、工役垂完、而方伯暨餘相繼罷歸。讎校印布皆有所未遑、越明年乙未秋、權公堣、膺命按節、始克印寄一本、俾正其脫誤、使斯文之重得不中廢而壽其傳」とあり、注15で觸れたように、「全錄」を底本とするが、姜栢年・權堣の協力のもと作られたもので、內容・巻數に異同がある。

(49)「柱世　少從家藏見讀書錄要語、而未知爲何等書也、及長又爲擧業之累、未暇一寓目焉、既而養痾累年、得以沉潛玩索、然後始知精當簡要、切於身心、而常有未見全書之嘆、閒嘗得唐本全錄」。

(50)「八年庚辰先生五十七歲…又愛薛文清讀書錄要語。竝與二冊置諸案上」（萬曆八年の條）、「常覽薛文清讀書錄。手圈其要語、置諸几案」（神道碑）。

(51)『牛溪先生續集』巻六「書薛敬軒讀書錄後」「薛敬軒讀書錄、最爲進修親切之訓。以川谷書院新刊一帙寄貺焉。餘敬受而識之」。

(52)『寒岡先生文集』巻九「書讀書要語續選後」「吳氏廷擧以其浩繁難於徧覽、就鈔其要語而傳之。學者常置之几案、以爲潛翫警省之助、則其有益於身心日用之閒者、豈下於濂洛諸先生之書哉。餘舊刻之川谷書院。既火於壬辰之變、新學者得見殆寡矣。今又刻于永嘉、又以僭率續選若干條增入焉。是蓋讀書錄要語也、胡君何必去之哉。今還吳氏之舊、以表其爲讀書錄之要語云爾」。

(53)『朽淺先生集』巻七「近者先師寒岡鄭先生就其二十卷中加取要語、名以續選、附諸卷末、仍復東湖舊名、繡梓於嶺南之花山。而此本未及行世。會同人徐君挺然得皖本、又繕寫鄭先生續選、合爲一冊以示宗海。宗海遂借鵝以謄。而据鄭先生刊本、揭以要語之名。至其序文則東湖辨於首、胡蕭與鄭先生載其尾、以備覽者之參考焉。因竊爲之說曰、皇朝性理之學、大抵皆有江西氣習、未聞有能遡洛閩淵源者」。

(54)『芝峯先生集』巻二十五「愚嘗閱薛敬軒讀書錄一書、喜其所言簡而切着、尤惓惓於主敬寡欲之方。因抄若干條、并附妄見、目曰讀書錄解。庶

幾闡明敬軒之餘旨云」。

(55)『東溟先生集』卷之七「北方書籍罕稀。至於性理文字、得見者尤尠。誠極寒心。刊出若干書、印布列邑、月朔講誦。仍竊伏念、自古聖帝明王、對育作新、儘從學問中出來、舜禹湯高宗是已。當此百六之會、險阻拂亂、安知玉聖明於成者。卽今迓續景命在茲、志氣堅確不挫在茲、隱忍奮發在茲、明是非別善惡在茲。區區犬馬之忱、竊自附於獻芹之義、忘其制品不精、冒死呈進、近思錄一件、別爲懸吐以進。尤切悚慄、近思錄二件。小學二件。性理字義二件。讀書錄二件」とある。文中の「懸吐」とは、漢文の後ろに助詞をつけて讀む訓讀のようなものである。

(56)「予今年春、到京城謁元相國混、語涉薛敬軒讀書錄。相公曰、文淸心學、非但著於此錄、又有從政名言。因搜而示焉、乃袖而還、謀鋟博布。蓋君子正己治人之法、存心應物之方、字字精切、句句喫緊、而無非日用當行之道矣」。

(57)『愚伏先生文集』卷一。

(58)『歸鹿集』卷十八「餘以退陶李先生言行遺編云。通判韓侯德弼、求有以報之。既以韓侯以薛文淸先生從政名言示餘。餘受而卒業。其言約而其理該、推而極之、天下國家可治、反而約之、又皆本之身心。而要可爲居官莅職者之龜鑑也。…然欲讀此者、必先讀先生所著讀書錄」。

(59) 阿部吉雄『日本朱子學と朝鮮』一八〇頁。

(60) 內閣文庫所藏。

(61)『貝原益軒資料集』上卷、第五卷『愼思錄』卷之十一。「篤信、壯歲好讀薛文淸讀書錄、遇其要言、加之以朱抹、頃信手搜出嘗所讀之舊本、披閱舊所加朱抹、擧其所可玩可疑書于此。且閒加鄙言於其下云爾」。例えば「深沉者、必有智、浮淺者、必無謀也」(『讀書錄』卷三)には「篤信謂、今試之衆人之閒、果然。以外占內不中者、鮮矣」と薛瑄に同調する言葉を附している。

(62) このことについては阿部吉雄『日本朱子學と朝鮮』第二節「山崎闇齋の朱子學と李退溪」に詳しい。

(63) 蓬左文庫・九州大學文學部・東北大學などが所藏する。『文會筆錄』卷二十でも「文淸集二十九、戒子書曰…」と全文を載せ、崎門學派に與えた影響が窺える。附錄に「薛文淸集、讀書錄より抄出」とある。

(64)『佐藤一齋全集』第一卷。

(65) 日本書誌體系五十二「近世の讀書」所收。

(66) それまで藩校の讀書は「本業」である孝經・六記(天明七年、塚田大峯の書)・論語・家語・孔叢子・毛詩・尙書・周易・禮記・左傳・國語・孟子・荀子に、歷史書を中心とした「助業」を加える內容であった。慶應三年、鶯津毅堂は藩の敎科課程を五階級にレベルを分ける改革を行った。

(67) 和刻本の版本については、『和刻本影印近世漢籍叢刊　讀書錄』所收、佐藤仁氏の解題に讓る。李浹、字は源甫。號は養愚。雩都の人。隆慶辛未進士。李浹の序には「因屬何子文孟、李子一松、而刻之蜚英館中」とあり、李一松は『江西通志』卷九十四によれば、萬曆壬辰の選貢で、字は茂甫、李浹と同鄕・雩都の人である。

(68) 最初の策のみ『敬軒文集』卷十一「試諸生策一道」であるが、他の策は『文集』『讀書錄』の中には見えない。萬曆年閒に出版されたものに附錄してあることを鑑みれば、假託であろう。『薛文淸公全集』所收薛瑄の八代目の孫裔・薛士弘が記した「先文淸薛公譜言集錄跋後」によれば、「萬曆丙午(1606)春、叨膺簡命、濫竽鄠、今供職之餘、不忘前念。幸而鄠附會城、得辱敎於咸寧滿君震寰、長安楊君脩齡。二君者、皆以海內人龍、摻刀巨邑、連牀之下、交口贊成。雖以闡追往哲、而其波潤士弘者、甚盛心也。遂走使檢家藏之未刻者。叔監生應第、生員應銓、以年譜・粹言・名言・文集・策目、凡五種附焉」とある。

(69)「右薛文淸策目五十八道者、蓬萊甯杲之所類次也。頃有人携來云、此世之所希見、其可信乎。豫謂、嘗觀薛氏門人閻禹錫所編之門類讀書錄、

其卷末登之、又閱文淸全集、其第二十八卷載試諸生策一道、卽五十八道之第一道也」。

(70) 尊經閣文庫・九州大學・京都大學人文科學研究所・國會圖書館・東北大學・堺市中央圖書館・臺灣東海大學圖書館など各地に殘っている。寛文十年（一六七〇）、十一年（一六七一）、延寶三年（一六七五）、天和元年（一六八一）、元祿五年（一六九二）元祿十二年（一六九九）の書籍刊行目錄に見える。

(71) 「…依此言以見之、則文淸公之道德事業略亦可知耳。餘今年夏至豐城、問家君之次、偶遊一禪林而獲見斯書、乃挾之還。…先儒以小學之書比神明父母。若夫居官守職者、以斯書比神明父母、而信之敬之、大用之則能利國家、小用之則亦能保其身。…加倭訓而命剞劂氏、繡梓以廣其傳。志道之士、不可忽斯書」。

(72) 福井保『江戸幕府刊行物』一〇一頁參照。官版『從政名言一卷』は寛政十一年に刻され訓點がある。

(73) 刊行者は、天王寺屋市郎兵衞、河內屋喜兵衞、出雲寺萬次郎、唐本屋新右衞門（寛政四年）、江戸堀野屋儀助（文政六年）、大坂積玉圃河內屋喜兵衞（文久三年）など。

【各版本目次表】

① 閻禹錫『分類讀書錄二十四卷』（成化）

卷1	道體門	道體上		春秋	卷9		中庸	卷13	論性門	卷19	事理門
卷2		道體下		禮樂	卷10	附錄	通書	卷14	論敬門	卷20	論文門
卷3	經說門	統說	卷6	小學			西銘	卷15	論仁門	卷21	論史門
卷4		易		大學			陰符經	卷16	出處門	卷22	諸子門
卷5		書	卷7	論語	卷11	論學門		卷17	敎人門	卷23	異端門
		詩	卷8	孟子	卷12	論心門		卷18	治道門	卷24	道學門

⇔華希閔『讀書錄節要十四卷』（康熙）

卷1 道體	卷2 論學	卷3 致知	卷4 存養	卷5 克治	卷6 家道	卷7 出處
卷8 治體	卷9 治法	卷10 居官處事	卷11 敎人	卷12 警戒改過	卷13 辨別異端	卷14 論聖賢

② 鄭維新『讀書錄十卷』（正德）

卷1	無極而太～則德不新	卷6	論語一書～佻浮薄者
卷2	性本自然～前之易也	卷7	孟子曰以～久而後見
卷3	人之性與～性無不在	卷8	左氏多有～卽非仁矣
卷4	大象辭皆～心能動人	卷9	伏羲則河～理爲氣主
卷5	凡卦六爻～私故不矜	卷10	在天爲命～理之自然

③張珩『讀書錄十一卷』（嘉靖）

卷1	無極而太～子之意矣	卷7	孟子七篇～發明如此
卷2	孔子所謂～可分先後	卷8	所謂知幾～進修之要
卷3	太極動而～一太極也	卷9	擧天地萬～原語人也
卷4	自一身言～私則息矣	卷10	在天爲命～靜一理也
卷5	易大象～消而天理明	卷11	誠卽五常～屬陽之類
卷6	讀陰符～實獲我心焉		

④侯鶴齡『薛文淸公讀書全錄類編二十卷』（萬曆）

卷1～3	易・書・詩・春秋・禮記
卷4～6	大學・中庸・論語・孟子
卷7～9	太極圖・通書・西銘・性理諸書發明・諸書評・名言
卷10～12	道統・聖賢評・諸儒評・史評・老莊・荀楊・文中子・釋氏・異端・論仙・文評・詩評・釋字義
卷13～14	理氣・陰陽・五行・天地・造化（附氣機）・鬼神・魂魄・天人・物理・感召・夢卜・道體・論性・論仁・論心
卷15	論學・論敬・事天・儆戒（附儆訓）・存養（附涵養）・省察
卷16～17	體認・體驗（附省驗）・克己・愼言・愼動・知行・自反・自信・自樂・安命
卷18～20	綱常・禮樂・治家・交友・接人・敎人・擧業・論治（附治亂）・王覇・觀人・君子小人・取人・事君・從政・相業・器量・出處・氣節

⇔張伯行『正誼堂叢書』所收『讀書錄八卷』

卷1	易總圖・易上經・易下經・易繫辭上下・書總論・虞書・夏書・商書・周書・詩總論・春秋總論・禮記總論
卷2	四書總論・大學・中庸・論語上下・孟子上下
卷3	太極圖・通書・西銘・性理諸書發明・諸書評・名言・道統・聖賢・諸儒
卷4	史評・老莊・文中子・釋氏・異端・論仙・文評・理氣・陰陽・五行・天地・造化・氣機・鬼神・魂魄・天人・物理・感召・夢卜
卷5	道體・論性・論仁・論心・論學・論敬・事天・警戒・警訓・存養・省察
卷6	體認・體驗・克治・愼言・愼動・知行・自反・自信・自樂・安命
卷7	綱常・禮樂・治家・交友・接人・敎人・擧業・論治・治亂・王覇
卷8	觀人・君子小人・取人・事君・從政・相業・器量・出處・氣節